2024 年 10 月 26 日

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

故国の便（1）

立命館大学文学研究科　落合優翼

【概要】

本章では加藤が通訳・医師の仕事を通じてみた日本人の一面、植民地主義の問題が語られる。まず、加藤は通訳の仕事を通じて、日本とフランスの労働運動家・政治家の違いを見る。フランス側は理詰めで考えるが、日本側にはそのような習慣がなかった。また、加藤が通訳として参加した第 41 回列国議会同盟会議では、旧植民地諸国代表による帝国主義・植民地主義批判を目の当たりにする。更に、加藤は同会議期間中にフランス代表と日本代表との面会で通訳を務め、核兵器をめぐる日本側の「悲願」とフランス側の「議論」の間に途方もない距離を感じる。

加藤は時に医師として、日本人に接することもあった。フランス旅行中に事故にあった志賀直哉に医師として出会い、会話を交わし、想像通りの彼の姿をみた。また、ヘルシンキオリンピックの実況のために渡欧していた、和田信賢の診察にあたるが、彼はパリにて客死する。加藤は和田を診断するなかで、一人のデンマーク人女性の看護師と人間的な繋がりを感じ、次第に彼女に愛着を覚えるようになった。加藤は彼女がパリに残ることを望んでいたが、彼女は「聖者」シュヴァイツァー博士の仕事を手伝うためにアフリカへ旅立つ。そして後に、彼女から手紙が届き、彼女がアフリカで不幸な事件に直面し、傷ついたことを知る。加藤はのちにこの出来事を「人道の英雄」（1955）という短編小説にまとめ、植民地主義とシュヴァイツァー博士を批判した。

【第 1 段落】（88 頁）

故国からの便は、手紙だけではなかった。パリでは日本からの旅行者があとを断たなかった。遠い親せきや、中学校の同窓生や、知人の知人たちが現れて、どこかへ「案内」をしてくれといった。「どこか面白いところはないか」とある大会社の副社長をしていた伯父もいった。その頃の旅行者たちは外貨の統制がきびしかったにも拘らず、ありあまるほどの金をもっていたようである。東京で一流の料理屋を知らなかった私も、そのために、パリではそういう場所のいくつかを心得るようになった。

2024 年 10 月 26 日

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

① 「大会社の副社長をしていた伯父」

岡本敬吉（東邦瓦斯社長岡本桜の息子）[1]

② パリの「案内」を頼まれる

・前章「中世」では、加藤はパリに「滞在している」意識と「住んでいる」意識が相半ばしていた。旅行者は加藤にパリの「案内」を頼む
→加藤がパリに「住んでいる」と考えていなければ、「案内」を依頼しないのでは？

・また、加藤は「東京で一流の料理屋を知らなかった」が、旅行者のために「パリではそういう場所のいくつかを心得るようになった。」
→ある面において加藤は、東京以上にパリ知るようになり、加藤のパリに「住んでいる」という感覚が強まったのでは？

【第 2 段落】（89 頁）

そういう「案内」とは別に、私はまた、折りにふれて、一週間ほどの会議の通訳を引きうけることがあった。たとえば、フランスの労働組合が、日本から総評の幹部を招待して、そのために、日本語の通訳をパリで募ったことがある。一時間あたりの払いはあまりよくなかったが、私は、フランスの組合運動に興味をもっていた。その仕事はおもしろかった。Ｃ・Ｇ・Ｔの幹部は、すじ道をたてて、彼らの組織や考え方を説明する。「勤務時間中の傷害の治療費その他は、すべて会社側が払わなければならない……」。日本側の一人が質問した、「労働者自身の不注意にもとづく事故も含めてのことか」「そのとおり」「しかしたとえば、鉄道の従業員が居眠りをして、怪我をしたとしたら、そういう場合には、どうなるのかねえ」「むろんそれも会社側の責任である」。そこで日本側が、騒ぎ出す。「そういってもなかなか通らないんだな、居眠りをしてひっかけられたとわかっている場合まで含めるとなると……」。日本人は仲間の間で議論をはじめる。フランス人は通訳を催促するように私の方をみる。私は何とかいわざるをえない。「居眠りにもとづく事故が、なぜ会社の責任になるのか、今や日本人はその理由を検討している」と私がいいかけると、フランス側の答えは、忽ち矢のようにかえってきた、「誰が好んで勤務時間中に居眠りをするだろうか。居眠りをさせるような労働条件を課したのは会社である。故に居眠りにもとづくすべての事故のすべての責任は会社が負わなければならない……」「そうはいってもねえ……」と日本側は、呟く。「そういう理くつが通れば問題がないんだよ」

[1] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018 年、25 頁。

「だからさ……」「いや、おどろいたねえ」――という気持ちが私にわからなかったわけではない。しかしその気持ちを、フランス語の文章にするのは、もはや通訳の能力を越えていた。

① 通訳の仕事

・加藤は第二回フランス政府給費留学生制度に半給費留学生として合格したが、学費は免除される一方で、渡航費と生活費は自弁する必要があった。また、半給費留学生には就労制限が課せられていたが、通訳は就労可能な仕事でもあった[2]。

→時給はよくなかったが、フランスの労働組合に興味を持っていたので、加藤は通訳の仕事を引き受けた。

・C・G・T（ Confédération Générale du Travail ）…「フランス労働総同盟」の略

1895 年設立。第一次世界大戦前の組合員数は 30 万人余りであったが、ロシア革命の衝撃のもとで 1920 年には組合員数が 160 万人近くになった。第二次世界大戦後の開放期には 400 万人以上の組合員を擁しており、二次大戦中の抵抗運動の過程で CGT 内での共産党の影響力が強まり、戦後解放期には CGT 執行部に対する共産党の影響力は決定的になっていた[3]。

・総評…「日本労働組合総評議会」の略

1950 年に左派系の産別会議、全労連に対抗して、産別会議を脱退した単産、中立組合、総同盟などが結集して設立された全国組織の労働者団体。1951 年に左派が主導権を握って平和四原則を採択し、破防法反対闘争、炭労スト、電産ストなど、戦後初期の労働運動の中心的存在となる[4]。

② 日本とフランスの労働運動家の比較

・フランス側の幹部は「すじ道をたてて、彼らの組織や考え方を説明」。

日本側…勤務時間中の居眠りによる怪我は会社側の責任か？

---

[2] 前掲、鷲巣（2018）351,370 頁。
[3] 「フランス労働総同盟」『日本大百科全書』（ジャパンナレッジ）https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000203200 参照。
[4] 前掲、鷲巣（2018）370 頁。

・フランス側…従業員が居眠りをして怪我をした場合であっても、そのような労働条件を課した会社側に原因があり、居眠りによる事故の責任は会社が負う必要あり。

・日本側…もし労働者が仕組んだものだとしたら？→賛同しきれない

加　藤…日本側の気持ちもわかる

日本側：「気持ち」⇔フランス側：「論理」

・加藤も日本側の「気持ち」を理解できたが、それを「フランス語の文章にするのは、もはや通訳の能力を越えていた」→なぜ？

・日本側の「気持ち」を理解するには、日本人の文化・考え方を理解する必要があり、それをフランス語の文章で伝えるには、フランスの文化・考え方を理解する必要。

→日本・フランス双方の文化・考え方を理解していなければ、日本側の「気持ち」をフランス語の文章にできない、しかしそれは「通訳の能力を越えていた。」

【第 3 段落】（89-90 頁）

フランス側組合幹部の一人は、中年の男で額に傷をもっていた。その由来を尋ねると、事もなげに、Ｓ・Ｓの拷問のあとだといった。彼は占領下のフランスで捕えられ、「二人の衛兵の頭を叩き割って」逃がれたのだという。「モスクワは好きでない、パリとちがいすぎる」とも彼はいった、「ヴィーンまで来ると、ほっとしたね。パリに似ているからだろう」。彼は共産主義者であったが、それ以上にフランス人であると私は思った。

①　「S・S」…親衛隊（Schutzstaffel）

・ナチス - ドイツの特殊部隊。略称はエス - エス（ＳＳ）。一九二五年に本格的に組織され、元来はヒトラーを護衛する組織であったが、一九二九年以後ヒムラーの指揮下に警察権を掌握し、占領地行政・強制収容所運営などを行なった[5]。

② 彼は共産主義者であったが、それ以上にフランス人である

[5] 「親衛隊」『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ）。

・組合幹部男性の政治信条は共産主義であり、モスクワの政治に近い。しかし彼は「モスクワは好きでない、パリとちがいすぎる」といい、「ヴィーンまで来ると、ほっとしたね。パリに似ているからだろう」と話す。

→おそらく、モスクワの街並みや人々の暮らしぶり、食事といった、モスクワの文化・生活がパリと違い過ぎたのだろう⇔ヴィーンの文化・生活はパリに似ていると感じた。

彼は文化・生活の面において、モスクワに親近感を覚えない。
政治信条での類似より、文化・生活面での類似が勝る。

→その点で「彼は共産主義者であったが、それ以上にフランス人であると私は思った。」

【第 4 段落】（90 頁）

私はまた国際代議士会議の日本側の通訳もした。その会議はスイスで行われ、およそ十二人ばかりの代議士の一団が、国会議長や大統領に面会をもとめたり、登山電車に乗って遊んだり、ひとりで何十という時計を買集めたり、商店の絵葉書をみんな買いとるといって売娘をおどろかせたりしていた。会議そのものに出て来ることもあったが、その人数は不定であった。少いときには二人で、そのうちの一人は眠っていた。目をあけて受信機を耳にあてている一人に、私は「通訳しましょうか」といったことがある。受信機には、英仏語の翻訳しか流れない。「いや、結構」とその人はいった、「みんなが自由とか、民主主義とかいっておる、およそわかっとることばかりだ」。しかし社交的なそういう会議においてさえも、旧植民地諸国代表の帝国主義批判は激しく、しばしば弾劾の調子を帯びるのに対し、西欧側の言い分は受太刀で、ほとんど弁解的に聞えた。その鮮かな対照は、戦後の一時期の国際的な雰囲気と潮流とを、見事に反映していたのである。そういうことのすべてが「わかっとることばかり」ではなかったろう。

① 「国際代議士会議」

・1952 年にスイスのベルンで開催された IPU（ Inter-Parliamentary Union：列国議会同盟）会議。加藤は駐スイス大使を務めていた萩原徹の斡旋により、同会議の通訳として同行した[6]。

[6] 前掲、鷲巣（2018）371 頁。

・日本は 13 年ぶりに同会議に参加し、以下の議員団を派遣した[7]。

大村清一（団長）	自由党（衆議院議員）	途中帰国
鈴木義男（副団長）	社会党（衆議院議員）	途中帰国
深水六郎（副団長）	自由党（参議院議員）	参加
浅利三郎	自由党（衆議院議員）	途中帰国
柏木庫治	緑風会（参議院議員）	参加
平沢長吉	自由党（衆議院議員）	途中帰国
水野彦治郎	改進党（衆議院議員）	途中帰国
原虎一	社会党（参議院議員）	参加
小笠原二三男	社会党（参議院議員）	参加
安井謙	自由党（参議院議員）	参加
芥川治	参議院事務次長	参加
山崎高	衆議院庶務部長	参加

*ただし、8 月 27 日に衆議院の解散があったために、大村団長を含めた衆議院議員は全員会議の途中から帰国した[8]。

・議員団は 8 月 20 日に羽田を出発し、8 月 28 日から 9 月 2 日まで開催の第 41 回会議に参加した。現地に到着してから会議が始まる 28 日までの間に、議員団は「国会議長や大統領に面会をもとめたり、登山電車に乗って遊んだり」していたのだろう。

② 旧植民地諸国代表の帝国主義批判

・第 41 回会議の参加国は 33 か国[9]（脚注参照）

---

[7] 『参議院公報附録　第四十一回列国議会同盟年次大会報告書』1 頁。から参加者一覧を作成。

[8] 同前書、2 頁。同書では「七月二十七日に衆議院の解散」と書かれているが、八月二十七日の間違い。

[9] 第 41 回会議の参加国は、ドイツ、オーストリア、ベルギー、ビルマ（ミャンマー）、ブラジル、セイロン（スリランカ）、デンマーク、アメリカ、エジプト、フィンランド、フランス、

一般討議で、セイロン（1948 年に英国自治領として独立）の代表議員は、インドシナ・モロッコ・チュニジアなどに残存する「植民地的精神」に対して、「斯くの如き観念は時代遅れにして苟も平和を回復せんためには、人たるに値する生活程度を世界中に打ち立てることが、絶対に必要であることを世界に理解せしめることは列国議会同盟の任務である。」と発言[10]。

パキスタン（1947 年に英領インドから独立）代表は、「幾百万の人間を植民地主義によつて抑えつけんとするのは誤りである[11]」と発言。

→「弾劾の調子を帯びる」旧植民地諸国代表による植民地主義（帝国主義）批判。

③ 「戦後の一時期の国際的な雰囲気と潮流」

・背景：1941 年の大西洋憲章で民族自決が唱えられる。

フランス解放後の植民地の状況…シリアでは、フランスの権益を残す形での独立に反発し戦闘が勃発。マダガスカルでは、ドゴール派による強制労働で住民の生活が困窮し、民族運動家たちが独立を目指すようになり、1947 年に大きな反乱が起きる。また、ベトナムでは 1946 年からインドシナ戦争が勃発していた[12]。

・第二次世界大戦後…民族自決の方針と宗主国に対する植民地の反乱と独立、帝国主義による植民地支配終焉のきざし→「戦後の一時期の国際的な雰囲気と潮流」

・日本も敗戦前は、朝鮮・台湾などの植民地を支配する植民地帝国であり、旧植民地諸国代表者による帝国主義批判は、植民地を失った日本にも無関係ではなく、「わっかとることばかり」ではない。しかし、日本の参加者は帝国主義の問題を自覚しておらず、加藤はその点を問題に感じたのではないか。

・植民地と帝国主義の問題…**【第 11～14 段落】**で具体的化。

イギリス、ギリシャ、ハイチ、インド、イラク、イラン、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、レバノン、ルクセンブルク、モナコ、ノルウェー、パキスタン、オランダ、フィリピン、スウェーデン、スイス、トルコ、タイ、ユーゴスラヴィアの 33 か国で、欠席したのはアイスランド、ベネズエラ、ニュージーランドであった。（同前書、5 頁。）

[10] 前掲『第四十一回列国議会同盟年次大会報告書』、16 頁。
[11] 同前書、18 頁。
[12] 平野千果子『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002 年、289, 291 頁。

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

【第 5 段落】（90-91 頁）

第四共和国の上院議員 H 氏は、社会党の代表二人に面会を申込んで、日本の外交政策に関する質問を繰出した。対中政策、台湾との関係、朝鮮の分割、核兵器、安保条約。「社会党はもちろん安保条約に反対ですよ。基地闘争にも参加している。そういって下さい」「どういう理由で反対しますか」「日本国の憲法は武装放棄なのだ。憲法に反するということだね」「それは法的根拠である」と H 氏はいった、「政治的根拠はどういうものですか」「戦争にまきこまれたくない、平和を念願する……」「ということは、軍事同盟一般が危険だという意味ですか、それとも特に日米安保条約が危険だという意味ですか」「いや、そう理づめでいわれても困るねえ」。

① 社会党代表の二人

・原虎一（社会党　参議院議員）、小笠原ニ三男（社会党　参議院議員）

② 日本とフランスの政治家の比較

・上院議員 H は、安保条約に対する社会党の政策認識を理詰めで質問するが、次第に答えに窮する社会党代表の二人。

・H 氏は、社会党の安保条約反対の理由を、法的根拠・政治的根拠に分類するなど理詰めで質問してくるが、社会党側は「戦争にまきこまれたくない、平和を念願する」という、「感情」を根拠として答える。

→フランス側の「議論」と日本側の「感情」がかみ合わない。

【第 6 段落】（91 頁）

「とにかくそれは、党の方針として決っているわけだ」と日本側の二人は顔を見合わせながらいった、「そういちいち、何故か何故かといわれても、われわれには答えられないね。核兵器に反対といえば、すぐに何故かというけれどもね、それは、君、広島の悲願だよ、わかるだろう、そういえば」「一体この人は核兵器に反対ではないのかね？」――

「訊いてみたら、いかがでしょうか」と私はいった。H 氏の答えは、理路整然としていた。フランス独自の核兵器の発展は、経済的にみて高くつき過ぎる、社会的にみて高級技

術者の他の領域での不足を強める、軍事的にみて有効な報復力になり難い、政治的にみれば、冷戦を強め、従って軍備と緊張との悪循環をおこす……私は今 H 氏の答えの内容を、すべて覚えているわけではない。しかし私が覚えているのは、そのときフランス側の「議論」と、日本側の「悲願」との間に横たわっていた途方もない距離である。その距離は、通訳としての私を途方に暮れさせたばかりではなく、日本人としての私に多くのことを考えさせずにおかないものであった。

① 核兵器反対の理由

・日本側の核兵器反対の理由は「広島の悲願」→「経験」と「感情」に基づく。

・フランス側は、核兵器の開発が与える経済・社会・軍事・政治への悪影響という観点から、自国の核開発に反対→理詰めの議論による反対。

② フランス側の「議論」と日本側の「悲願」との間に横たわっていた途方もない距離

・フランス側の「議論」と日本側の「悲願」の間に途方もない距離を感じた。

加藤は広島で、自身と被爆者との間に「超え難い無限の距離」を感じていた[13]。

→経験の有無による超え難い距離は広島で体験済み

日　　本…「広島の悲願」（経験・感情）を根拠とした核兵器反対

フランス…理詰めの「議論」による核兵器非保有（ただし、1960 年に核実験）

・「通訳としての私」…経験と感情に基づく「悲願」をどうフランス語の文章にするか？

・「日本人としての私」…加藤は、《ノー・モア・ヒロシマ》や広島についてのすべての言葉に「その通りだが、しかしそれだけではないだろう[14]」（2 章「広島」）と感じていた。→加藤は「悲願」という言葉にも疑問を感じる。

核兵器反対の理由を「悲願」だといっても、フランス側と「議論」にならず、両者の距離は縮まらない。ただ、「議論」に徹したとしても加藤は疑問を感じるのではないか？

→双方の距離は、加藤に「多くのことを考えさせずにおかないものであった。」

[13] 加藤周一『羊の歌』続、岩波書店、1968 年、13 頁。
[14] 同前書、14 頁。

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

【第 7 段落】（91-92 頁）

通訳の仕事を通して、私はパリで多くの人々に会い、また東京では知らなかった日本人の一面をも知るようになった。しかしそれは必ずしも通訳の仕事だけによるのではなかった。私はパリで医学の研究に従っていたけれども、医を業としてはいなかった。しかしたまたま客舎に病んだ同胞が、知人を介して日本人の医者に相談したいと申出て来たときには、よほどの支障のないかぎり、その需めに応じることにしていた。

① フランスでの医学研究・医療活動

・半給費学生として加藤渡仏していた加藤は、留学中にパリ大学医学部、パスツール研究所、キュリー研究所で医学研究に従っていたが[15]、医師を仕事にしてはいなかった。

だが、知人を通じて紹介された日本人の患者に医療行為を行っていた。

・前段落までは、通訳の仕事を通じて見た日本人の一面が書かれてきた。以降の段落では、医者の仕事を通じて知った日本人の一面が書かれる→【第 8 段落】【第 9 段落】

【第 8 段落】（92-93 頁）

あるとき私は、高田博厚氏から電話で、志賀直哉・梅原竜三郎の両大家が自動車事故に出会ったことを知った。事故は、イタリアを廻ってパリに着いた翌日に、パリの郊外でおこったのである。幸いにして大きなけがはなかった。梅原氏は、額にかすり傷を負っただけだといって、元気がよかった。志賀さんは――たしかに疲れてみえたけれども、医者の立場から、心配な点はどこにもなかった。高田氏と宿を訪ねた私は、そのことを説明し、休養をすすめ、役にたつことがあれば何でもするからといって、電話番号を残して帰った。私はそのときはじめて梅原氏に会った。志賀直哉その人には、言葉を交わしたのははじめてであったが、いくさの間、水道橋の能楽堂で、何度もその超然として高雅な風貌に接したことがあった。その面立ち、その白髪、その落ちつきは、以来少しも変っていないと私は思った。事故から数日の後、早くも私たちは、午後の陽ざしの強いシャンゼリゼーの大通りを、話しながら歩いていた。「マンテーニャがおもしろかったね」と志賀さんはいった、「あのキリストの像があるだろう、あのことを小説に書いてみたいと思う

[15] 前掲鷲巣（2018）503 頁。

……」。日本を出て、まずギリシャとエジプト、それからイタリアの旅は、北部からはじめて南に降ったのである。（マンテーニャのキリスト像は、北部ミラノの美術館にある）。ローマへ着いた頃には、疲れもしたし、「大きな眼をうるませ天を仰いでいる」絵をあまりに沢山見てきたので、もはや「ラファエルなどろくに見る気もなくなった」らしい。そういうところは、私がその風貌と仕事から長い間想像していた志賀直哉その人に他ならなかった。鋭い感受性、的確な言葉、徹底した自我中心主義、または文学的唯我論（ソリプシスム）……穏やかで、傲らず、衒わず、堂々として、シャンゼリゼーの全体とも見事につり合うもの。イタリア文芸復興期でさえも揺さぶることのできなかったこの人物が、シャンゼリゼー程度のところで、右顧左眄するはずがなかったともいえるだろう。周囲を見向きもせずに、志賀さんは悠々と話していた、「もうよくなった、疲れただけのことだね、いちばんおもしろかったのは、マンテーニャのキリスト像だが……」。

① 登場人物

・高田博厚[16]

彫刻家。石川県の生まれ。高村光太郎に師事。渡仏して、ロダン、ロマン＝ロランらと交際。肖像彫刻に優れる。帰国後は新制作協会に所属。同人誌「白樺」に参加し、文筆でも活躍。明治 33～昭和 62 年（1900～87）

・志賀直哉[17]

小説家。宮城県生まれ。学習院を経て東大中退。明治 43 年（1910）「白樺」創刊以後、中心作家の一人として「濁った頭」「大津順吉」「清兵衛と瓢箪」などの鋭敏な感覚と強固な自我意識の見られる短編を数多く書いた。大正中期より「城の崎にて」「和解」「焚火」などの自伝的、心境小説的作品をてがけ、芸術と実生活との相剋をのりこえた強いリアリズム文学を樹立、昭和 12 年（1937）には大作「暗夜行路」を完成した。明治 16～昭和 46 年（1883～1971）

・梅原竜三郎[18]

[16] 日本国語大辞典「高田博厚」（ジャパンナレッジ）
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002029736fcxQgNDL04
[17] 日本国語大辞典「志賀直哉」（ジャパンナレッジ）
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200201d6cbf4zfgLYM9f
[18] 日本国語大辞典「梅原龍三郎」（ジャパンナレッジ）

洋画家。京都府出身。聖護院洋画研究所で浅井忠に学び、渡仏してルノアールに師事。二科会、国画会などに加わり、華麗で躍動感にあふれる作品を発表する。東京芸術大学教授。文化勲章受章。代表作「裸婦扇」「北京秋天」など。明治 21～昭和 61 年（1888～1986）

② 志賀直哉の旅程[19]

日付	内容
1952 年 5 月 31 日	日本を出発
6 月 2 日	イタリアのローマに到着
6 月 2～20 日	ローマ、ナポリ、アッシジ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノを旅行
6 月 20 日	フランスのパリに到着
6 月 20～27 日	フランスに滞在
6 月 27 日	スペインに到着

加藤は志賀の旅程について、日本→ギリシャ→エジプト→イタリア（北から南）と書いていたが、これは加藤の記憶違いか。

・自動車事故

自動車事故は 6 月 21 日に発生か。

【志賀が妻康子に宛てた 6 月 22 日の書簡】

「伊太利でもさうであつたが、巴里に来て自動車の多いには驚いた　しかもそれが日本の自動車の倍位の速さで走つてゐる　今ゐるシャンジェリゼーの町など遠くからガイセン門まで広い通りの右側を見渡すと自動車の赤いテールライト（尾燈）が丁度提灯行列のやうに遠くまで続いてゐる、道を横切るのが一ト仕事だ。[20]」

→志賀はパリを走る自動車の数と速度に驚き、道を横切るのに苦労。

③ 志賀が関心を寄せた絵画作品

---

https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002006ff6de9Wx5Ap5Z

[19] 志賀の旅程については、『志賀直哉全集』20 巻、岩波書店、2000 年、pp.198,203,206,207,214,219-222。の書簡（書簡番号は、2266,2275,2277,2285,2289）から作成。

[20] 前掲『志賀直哉全集』19 巻、214 頁。

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

・『羊の歌』では、志賀はマンテーニャ「死せるキリスト」に感心し、ラファエルの作品には関心を示さなかったと書かれている。

【1952 年 6 月 28 日　志賀直哉発　広津和郎宛書簡[21]】

> （前略）マンテニアのミラノにあるキリストの死骸の画、ポッチセリーのヴィーナスの誕生、（フィレンツェ）などいいと思ひ、特にマンテニアには余りの写実に驚きました、大体ルネッサン〔ママ〕及びそれ以后の宗教画は面白くなく、システィーンチャペルのミケルアンジロ〔ママ〕なども余り感銘なく、ミケランヂェロはダビデの彫刻が矢張り大好きでした、ラファエロは殆ど総て感心せず円の中に描いたマドンナは色が実に美しい〔ママ〕く、これだけをよく思ひました、大体中世以前のプリミチーヴを面白く思ひました、（中略）ルネッサンスといふものは美術史で余り持ちあげ過ぎた事は確かだと思ひます、（後略）

・志賀は「ヴィーナスの誕生」（1485 年頃）、「死せるキリスト」をよく思い、特に「死せるキリスト」の写実性に驚く。

ミケランジェロの作品では、「ダビデ像」（1501-1504 年）が好きで、システィーナ礼拝堂の壁画には感銘を受けない。

ラファエロの作品は「小椅子の聖母」（1512 年頃）だけ感心。

志賀はルネサンス期以降の宗教絵画を評価していない。

【図】左から順に「ヴィーナスの誕生」「ダビデ像」、「システィーナ礼拝堂の天井画」「小椅子の聖母」[22]

---

[21] 同前書、219 頁。

[22] 引用した画像のリンク一覧。
「ヴィーナスの誕生」（https://www.uffizi.it/en/artworks/birth-of-venus）
「ダビデ像」　（Michelangelo's David: Admire World's Greatest Sculpture at Accademia Gallery）
「システィーナ礼拝堂の天井画」
（https://www.museivaticani.va/content/museivaticani/en/collezioni/musei/cappella-

第 50 回加藤周一文庫公開講読会「『続羊の歌』を精読する

→加藤が『羊の歌』に書いている内容とほぼ一致。加藤はこの手紙の内容と似た会話を、志賀と交わしたのだろう。本段落では、志賀が最も感心したマンテーニャとほとんど感心しなかったラファエロが対比される。

→「イタリア文芸復興期でさえも揺さぶることのできなかった」という文章になる。

・ブレラ美術館（イタリア、ミラノ）、『死せるキリスト』（マンテーニャ）

・画像引用元 Lamentation over the Dead Christ | Pinacoteca di Brera (pinacotecabrera.org) **（制作年：1483 年、サイズ（cm）：68x81[23]）**

---

sistina.html）
「小椅子の聖母」（https://www.uffizi.it/en/artworks/la-madonna-col-bambino-e-san-giovannino-detta-madonna-della-seggiola）
[23] 参照元 https://pinacotecabrera.org/en/collezione-online/opere/the-dead-christ-and-three-mourners/（2024 年 10 月 15 日閲覧）

・アンドレア・マンテーニャ[24]

イタリア、ルネサンスの画家。パドバ派、フィレンツェ派、ベネチア派などの影響を受け、北イタリアのルネサンス様式の確立に寄与。パドバ、マントバで活躍し、銅版画にもすぐれた作品を残す。代表作に「死せるキリスト」など。（1431～1506）

④ 加藤による志賀の人物評

・加藤は志賀と直接話したことはなかったが、戦時中に水道橋の能楽堂（宝生能楽堂）【参照：『羊の歌』「青春」】で何度も彼の「超然として高雅な風貌に接し」ていた。また、彼の仕事からもその人となりを感じていた。

→加藤は実際に志賀と言葉を交わすが、志賀は想像していた通りの「鋭い感受性、的確な言葉、徹底した自我中心主義、または文学的唯我論（ソリプシスム）……穏やかで、傲らず、衒わず、堂々として」いる人物であった。更にそのような志賀の態度は「シャンゼリーゼ全体とも見事につり合うもの」とも評価。

・「もうよくなった、疲れただけのことだね、いちばんおもしろかったのは、マンテーニャのキリスト像だが……」→パリにいても、志賀はイタリアでみた作品の話を繰り返しており、彼の右顧左眄していない様子や穏やかで堂々としている様が表現。

[24] 日本国語大辞典「マンテーニャ」（ジャパンナレッジ）
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200203faeb104hln6bY6